小学校教員養成課程におけるダンス教育

Dance Education in the Primary School Teacher's Course

体育教室　佐分利　育　代

はじめに

小学校高学年以上の表現運動や創作ダンス（以下ダンスとする）の学習指導研究には，「恥ずかしさ」を取り除くことを第一に掲げているものが多い。「恥ずかしさ」は，学習内容の明確化と学習の過程を通し解消できると考えられるが，「恥ずかしさ」や「ダンスぎらい」を理由に学習に対して心を開かない児童，生徒がいることも無視できない。ダンス学習指導の方法論を展開する上で「学習に向かわせる」ことの難かしさは，他のどの教材と比較しても大きな課題である。

一方指導者の側でも，ダンスを扱いにくい教材と考えたり，「子どもがいやがる」からと身構えて指導にあたることがある。学習内容の具体化や構造化が進められている今日でもなお，学習者のみならず指導者にもダンスが難かしい教材とされているのはなぜであろうか。

このことについて三浦弓枝は，「何よりの問題は積み重ねがない点かも知れない。小，中，高，大学とどの段階でも，初歩指導から始めなければならないのが現状である。」と指摘する。[①]すなわち，過去35年をかけても解決し得なかったダンス学習の宿命ともいうべき課題は，ダンス経験の不足，継続した経験の無さからくる「恥ずかしさ」や「ダンスぎらい」の存在である。学習者の精神的な発達に対して，あまりにもアンバランスなダンスの技能は，表現意欲にとって大きな障害となっている。発達段階に即した継続的な学習こそ，期待を持って次の「学習に向かわせる」ための必須条件なことは言うまでもない。

しかし，昨年の調査による昭和56年度の鳥取県小学校でのダンス指導の実態では，[②] 体育の時間全体の10%以上をダンスにあてている教師は，調査対象250人の29.2%（73人）にすぎなかった。そして，ダンスの教育的価値を理論的には評価しながらも，自分自身ダンスの経験がないので指導に自信がないとする教師が約50%もいた。また，男性教師の多い高学年ほどダンスは指導されておらず，最も望まれる継続した学習が不可能な結果であった。この現状を打開するためには，講習，研究会，学校全体としての取り組み，教員養成での指導，何よりも教師自身の主体的な研修等，積極的な対策が考えられるべきである。

さて，鳥取大学教育学部小学校教員養成課程では現在，ダンスは，器械運動，陸上運動，ボール運動，水泳と共に，全学生が経験できるシステムがとられている。つまり，ダンス経験のある男性教師の養成の機会が与えられていることであり，その責任は重い。しかし，中学，高校と，少しのフォークダンス以外はダンスをしてきていない男子学生に加え，女子学生にも未経験者がいる。受講者全体の約半数がダンスの未経験者であり，経験のある学生でも継続的で充分な学習をしてきたとは言い難い。これらの学生を，初歩的学者から一気に指導者に引き上げねばならないのが現実である。

限られた時間内での，初歩指導と指導者養成を兼ねた内容の検討は，教育現場での積み重ねのあるダンス学習を可能にするための重要な一手段と考えられる。

目的

学習者が「恥ずかしさ」を克服し，ダンスの楽しさを味わえるため，さらには発達段階に即した学習を重ねられるためには，指導者自身がダンスの特性や技能の段階を明確にとらえていることが必要である。そして，指導者自身のダンス観を持って学習者に何を経験させたいかを考えるべきである。教員養成のための限られた時間内にどのような技能が知識として身についたか，また，ダンスに対する見方がどう変化したかは，身体運動などのいわゆる表現技能を通して見た達成度と共に興味深い問題である。

本研究は，昭和55年度小学校体育実技(1)で３回のダンス学習を経験した学生を対象に，昭和56年度小学校体育実技(2)においてさらに３回のダンス学習指導を行なった時，学習に対する意識がどう変化したかを知ると共に，知識としての技能の段階を考察し，小学校教員養成課程でのダンス学習指導の方向を問うものである。

方法

昭和56年度小学校体育実技(2)における３回の学習内容と学習活動，及び感想を学習者に毎回レポートして提出させ，各学習内容に対する感想を分析，比較した。レポートには客観的内容と主観的な感想を区別して書くことと，できるだけ具体的，詳細に書くことを指示した他，１回目のレポートを提出した際には指導案の形式をとるように再び指導した。感想は以下のように抽出し比較検討の対象とした。

イ，「恥ずかしさ」「ダンスぎらい」の追跡を意図し，各学習内容に対する達成感と非達成感を抽出する。

ロ，知識として身についた技能を把握するために感想を「踊る」「創る」「観る」の各技能の観点から抽出する。

対象

昭和55年度小学校体育実技(1)を受講し，３回のダンス学習を同じ内容で経験した鳥取大学教育学部学生で，継続して昭和56年度小学体育実技(2)を受講した学生（男子48名，女子77名）。

(1)　昭和55年度小学校体育実技(1)（２年次指定）の学習目標及び学習内容

教材研究より，学生自身のダンス経験を目標に100分×３回の指導を行なった。到達目標は「とらえられる」[3]段階である。各回の目標と内容は以下のようである。(昭和55年度小学校体育実技(1)の全受講者は男子55人，女子82人)

第１次　　実施日　４月21日（C班）５月19日（B班）６月９日（A班）[4]

学習目標・動きが感じを持つことを知る。

学習内容・①リズムに合わせ，いろいろな向きや方向に走る。

②いろいろなイメージを持った「走」を行なう。

速そうな　遅そうな　水中を　ぬかるみを　坂を　逃げる　戦う等

③群での「走」の持つイメージを味わう。

流れ　群れ　時　雨等

第2次　実施日　4月28日（C班）5月26日（B班）6月16日（A班）
学習目標・身体全体でとらえ，身体全体で表現することを知る。
学習内容・①ボールになって全身で動く。
②「ボールとつく人」や「木と風」「水とポンプ」など，動きながら相手も動かしてあげられる題材をみつけ全身で表現する。2人組。
③グループで「波」の動きをみつけて全身を使い表現する。10人前後。

第3次　実施日　5月12日（C班）6月2日（B班）6月23日（A班）
学習目標・対象の動きの特徴をとらえ，全身で表現する。
学習内容・①拍節的なリズムを持つ動きを全身で行なう。
②「時計」をテーマに1人で拍節的な動きをみつける。
③2人組みで，「時計」をテーマに動きの特徴をとらえ，感じ合いながら全身で動く。
④8人グループで「時計」をテーマに3つ以上の異なった動きをみつけ，感じの出る長さだけ続けて踊る。発表する。
⑤課題（自由題による1人の表現）
体育館の周辺より題材をみつけ，動きの特徴を3つ以上とらえ全身で続けて表現する。1人づつ発表。
表現内容と，できばえについての感想と，次年度の学習への希望等自由記述し提出する。

(2) 昭和55年度小学校体育実技(1)の課題のできばえに対する評価

個人の表現について，A(題材の動きの特徴を明確にとらえ全身の動きで表現している。)，B(題材の動きを3つ以上みつけ全身で表現している。)，C（題材をみつけられない。題材の動きのとらえ方が曖昧。全身を使って表現できない。)の3段階で評価した。Cは学習目標に到達できなかったと評価した。

受講者全員についての評価は以下のようである。男女による差はあまりみられなかった。

表1　小学校体育実技(1)の課題のできばえに対する評価

評価	男子		女子		全体	
A	5人（9.1%）	49人（89.1%）	15人（18.3%）	77人（93.9%）	20人（8.9%）	126人（92.0%）
B	44人（80.0%）		62人（75.6%）		106人（77.4%）	
C	6人（10.9%）		5人（6.1%）		11人（8.0%）	

「対象の動きの特徴をとらえ，全身で表現する」という学習目標は一応達成したと評価できる。しかし，対象の動きの特徴を鮮烈に受けとり表現できている者はあまり多くいなかった。何をどうとらえたら良いか，今回の学習では明確には理解できなかったとも考えられる。また，一人での発

表を課せられたことから動きが小さくなってしまった者が多い。伸び伸び表現させてやるための場面設定と，課題設定の再考の必要性を強く感じた。

(3) 昭和55年度小学校体育実技(1)受講後の感想

第3次の課題発表後の感想を，特に初めてダンス学習を経験した男子学生について，ダンス学習全体への感想と課題のできばえに対するものとに分けてとり出した。

表2　ダンス学習と課題のできばえに対する男子学生の感想

ダンス学習	(人)	課題のできばえ	(人)
恥ずかしい	18	思うようにできなかった	12
もうやりたくない	8	緊張した	9
素直になれない	4	何をやっているかわからないうちに終った	8
その他否定的な感想	5	グループでやりたい	7
難しい	8	どんなふうに見えているのかわからない	3
初めてで苦労した	3	自分にしては良いでき	2
基本のパターンを知りたい	2		
楽しかった	3		
意義を感じた	1		

表2のように，男子学生にとって初めてのダンス学習は，恥ずかしさや否定的な感想を持たせる楽しくないものだったと言える。そして，その大きな原因は，「思うようにできなかった」「何をやっているのかわからないうちに終った」「どんなふうに見えているのかわからない」など，発表についての感想に表われていると思われる。すなわち，達成感を味わえなかったことや自己の技能への不安である。

女子学生の感想にも「1人の発表で恥ずかしさが先に立った。」「緊張して思うように体が動かなかった。」「考えていた半分もできなかった。」等が多かった。

経過

(1) 昭和55年度小学校体育実技(1)での学習指導の問題点

多くの「恥ずかしさ」や否定的な感想を持たせてしまった原因を指導の側から見ると，目標設定，指導方法，課題設定のそれぞれに問題があった。

まず，目標設定に関して2点があげられる。1点はダンス技能としての到達目標である。すなわち，3回の指導を，最も初歩的段階の「とらえられる」のみを目標に行なったことで，このために各時間の目標に差がなくなり，学習者に学習の進行を自覚させられなかった。言語表現では，まとめることのできる学習者である。何らかの形で作品にまとめられる段階にまで目標を引き上げるべきであった。

もう1点は，教材研究ということを前面に出さなかったことである。学生自身のダンス経験を目指したことが，「素直になれない」「男性的な種目をやりたい」「バカになりきれない」などの消極的

な構えをとらせたのではないかと思われる。

指導方法での問題は，学習目標を学生に対して客観的，明確に知らせなかった点であろう。学生自身のダンス経験を目指すあまり，具体的に与えたのが学習内容に対する手がかりばかりで，知的理解を通しての主体的な取り組みの機会を与え得なかったと反省できる。

最後にあげられるのは課題設定の問題である。個人の発表という課題は3回の学習の終りとしては，必要以上の緊張と恥ずかしさを与えることになった。

以上の問題点は，教材研究の内容を前面に打ち出し，しかもグループによる発表を課題とした，昭和53年度小学校体育実技(1)で，71名の男子学生のうち「恥ずかしかった」と感想を述べた者が，6名しかいなかった[⑥]ことと比較しても，検討，改善の必要がある。

(2)　昭和56年度小学校体育実技(2)(3年次指定）の学習目標及び学習内容

前年度の学習の反省より学習指導目標を次のように決めた。

1．ダンスの楽しさを味わわせる。

2．学習者に学習目標を明確に知らせ，技能を段階を追い自覚しながら伸ばせるようにする。「まとめられる」段階[⑥]まで到達させる。

3．教材研究として主体的に取り組ませ教材研究への意欲を持たせる。

指導上の留意点としては，群舞の探求と同時に，伸び伸びとした表現ができるように，グループ活動や発表を中心に置くこと，個人での表現練習は可能な限り一斉に行なわせること，表現の手がかりを精選して与え動きに専念できる状態をつくることを掲げた。

各回の学習目標と内容を以下に示す。

第1次　実施日　6月25日（B・C班）7月9日（A班）

学習目標・対象の動きの特徴をとらえ表現する。

学習内容・①「走」をテーマにいろいろな動きをみつける。

②いろいろな動物の「走り方」や「歩き方」の特徴をとらえる。2人組。

③好きな動物の「走り方」や「動き」の特徴をいろいろみつける。8・9人。

第2次　実施日　7月2日（B班）8月29日（C班）8月30日（A班）

学習目標・場面の特徴をとらえ続けて踊る。

学習内容・①いろいろな質の紙の動きの特徴をみつけ，全身で表現する。2人組。

ティッシュペーパー　段ボール　わら半紙　ポスター　新聞紙

②海の中のいろいろな生物の様子をとらえ，その気持になって続けて踊る。8人組。

①で使用した紙を岩や海草にみたてる。

③知っている「海の仕事」の5つの場面を紙にスケッチし，それぞれの場面の動きをみつける。各場面の動きを続けて踊る。(8人組)

第3次　実施日　8月31日（B班）9月3日（C班）9月10日（A班）

学習目標・表現の中心がひきたつように全体をまとめる。

学習内容・①「自然の威力」を大きなテーマに，グループで題を選び，表現の中心の動きをみつける。

②表現の中心がひき立つように作品をまとめ，踊り込む。
③作品の発表と観賞を行なう。

結果と考察

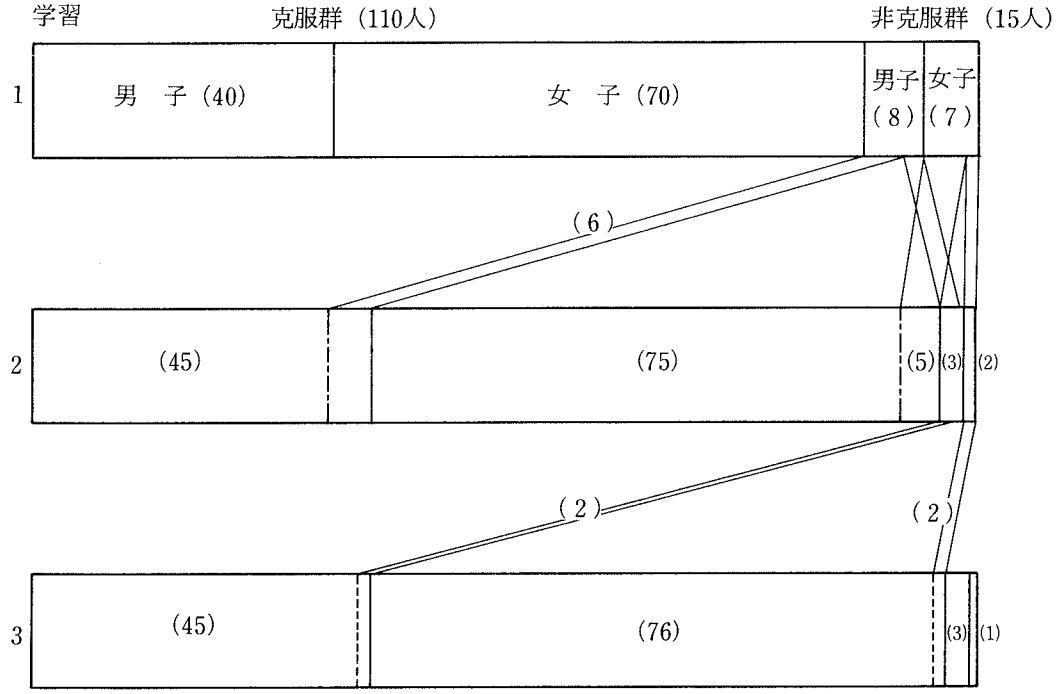
各学習毎に提出されたレポートについて，学習が楽しく行われたか，また，学習の目標や内容が理解できたかを検討した。

3回の各学習での感想のうち，「楽しかった」「…はおもしろかった」「…ができた」「…がわかった」等を達成感として，「…ができなかった」「自分には無理だ」「恥ずかしい」等を非達成感として抽出した。

(1) 各学習における達成感

図1は学生1人1人について達成感が得られたかどうかを検討し，学習毎にその人数をまとめたものである。学習の中で1度でも達成感を得ることができた者を，「恥ずかしさ」や「ダンスぎらい」を克服し学習に向かうことができたとして，克服群とした。これに対し，非克服群は，1度も達成感を得られなかった者である。

図1　56年度（3年次）の学習における克服群と非克服群



克服群‥達成感を持てた者

非克服群‥達成感を持てなかった者

非克服群の学習者全体に占める割合は，第1次の学習で12.0%（男子16.7%，女子9.1%），第2次では4.0%（男子6.2%，女子2.6%），第3次では3.2%（男子6.2%，女子1.3%）であった。

この割合は，昭和55年度の感想で非克服群が大半を占めたのに比較し，第1次の段階から非常に小さい。そして，第2次からはさらに非克服群の減少が見られた。第2次と第3次の非克服群の割合は類似していた。

第1次の学習で，前年度に比べ非克服群が少なかった理由としては，男子学生では，「去年やっているので」「2度目なので」学習にスムーズに入いることができたと，学習前の状態を書いている者が3名あった。女子でも4名の者が，「2年の時より恥ずかしさがなく伸び伸びとやれた。」としている。このように，2度目の経験であることは，学習内容の予測がある程度可能なため，どの学生にも学習に溶け込み易い心の状態をつくると考えられる。

「恥ずかしがっていてはよけいみっともないという昨年の教訓から，今年は開き直ってすると心に決意。」と男子学生が書いているように，まず，学習しようとする態度にならせることが，特に，初めて経験する男子でしかも指導者としてぜひダンスを知らせたい学生を対象とする時に配慮したいことからである。

また，「時間がたつにつれて，2年の時よりすんなり学習に溶け込むことができた。」「始めはやりにくかったが，終りに近づくと気分的になりきってやれた。」等，学習の過程で次第に恥ずかしさや緊張感が無くなっていたことを内省している者も多かった。第1次の学習経験は，「一年ぶりのダンスで戸惑ったが，動いているうちに次第に楽しくなった。」というように克服者を増し，第2次でさらに非克服者を減少させる力となったと思われる。

第2次以降，「恥ずかしい」との感想は書かれていなかったが，第1次の学習を通し，「恥ずかしさ」からダンスの特性や技能に興味が移ったと考えられる。

表3は，第1次の学習内容と学習活動，及び，その活動に対する学生の感想である。感想は達成感と非達成感，さらに，「踊る」「創る」「観る」の各技能の観点から分類した。数字はその感想を書いた学生数，( )内はその活動で初めて達成感を得た人数である。

活動に対する感想は学習の経過とともに，「走るだけなのに楽しい」から，「体は動かしてみると様々な動きができる」との驚きに，そして，「自分のとらえた動物観を全身で表現することだ」のような表現原理や技能へと変化している。

特に，最も多くの学生が達成感を得た，「人真似でもやるとやらないと大違い，体は動かしてみると様々な動きができる。」という感想に象徴される驚きの後は，「自分だけの動き」「同じイメージで色々な動き」「同じ音楽から色々のイメージと動き」「様々な意見，異なった動き」等，個性と創造性への可能性を見い出し，興味が広がっている。また，「大きく思い切って動くとその良さがわかる」「全身で動けた」「大切なのは自分のとらえた動物感を全身で表現することだ」「何度も練習すると恥ずかしさもなくなり，…なりきってやれた」と全身でとらえ表現できたことや踊り込みが，恥ずかしさを克服させていることがわかる。

グループや2人組での活動も恥ずかしさを感じさせることなく表現を探求させている。このグループ活動については，「動きを真似し合うおもしろさ」や「1人ではできない新しい動き」ができ，「ダンスが下手だがグループだと何とかできる」こと，「一緒に創り上げる喜び」や「発表の充実感をわかちあえる」と評価している。

一方，非達成感では，「体が思うように動かない」「『走』にとらわれ新しい動きができなかった」「日頃何げなく見ているから，ありきたりになった」等，ダンス経験の不足に起因すると思われる

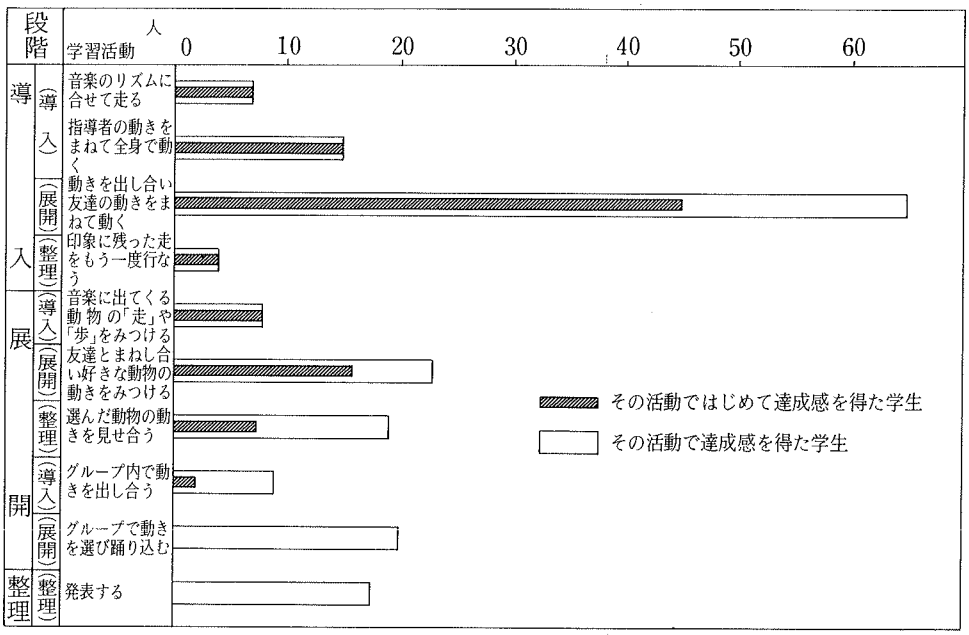
表３　昭和56年度小学校体育実技（２）第１次の学習経過と学習者の感想

	学習内要		学習活動		達成感	男（人）	女（人）	計（人）		非達成感	男（人）	女（人）	計（人）
導入	「走」をテーマに色々な動きをみつける	（導入）	音楽のリズムにあわせて走る（１人）	踊	走るだけなのに楽しい	4(4)	3(3)	7(7)	踊	リズム感がない	1	1	2
			「走」をテーマにした指導者の動きをまねて全身で動く（１人）	踊	リズムにのって動くのは難しいが楽しさもある	6(6)	9(9)	15(15)	踊	動きについてゆけない	2	1	3
		（展開）	「走」をテーマに動きを出しあい、友達の動きをまねて動く（８～９人）	踊	始めは様にならなかったが次第に思い切った伸び伸びした動きができた	2(2)	7(3)	9(5)	踊	動作が小さくなった	0	5	5
					汗びっしょりになって動いている自分に気がついた	3(2)	4(4)	7(6)		体が思うように動かない	2	8	10
				創	人まねでもやるとやらないと大違い、体は動かしてみると様々な動きができる	9(8)	13(12)	22(22)	創	まねはできても表現できない	0	2	2
					自分だけの動きを創り動くのは楽しい	7(6)	10(6)	17(12)		個性がなかった	2	0	2
					同じイメージで色々な表現ができる	1	9	10		「走」にとらわれ新しい動きができなかった	4	8	12
		（整理）	印象に残った「走」をもう１度行なう（８～９人）	観	大きく思い切って動くとその良さが出る	0	4(4)	4(4)	観	人体の動きの美しさに驚くと同時に自分には無理だと思う	0	1	1
展開	色々な動物の「走り方」や「歩き方」の特徴をとらえる	（導入）	音楽（動物のカーニバルK-130）を聴き、そこに出てくる動物（４種）の「走り方」や「歩き方」の特徴をとらえ全身で動く（１人）	創	音楽によってイメージが持ちやすかった	5(5)	3(3)	8(8)	創	ひらめくものがなく、あいまいな動きになり、同じことの繰り返しだった	1	1	2
		（展開）	友達のみつけた動きをまねしあう（２人）	踊	その気になって楽しんだ	4(4)	7(7)	11(11)	創	日ごろ何気無く見ているから、ありきたりになった	3	4	7
			最も気にいった動物を選びその動きを練習する（２人組）	創	まねをすることで自分の動きもわかり色々な動きもできた	6(1)	4(4)	10(5)					
				観	相手が一生懸命なのを見て私もがんばった	0	2	2					
		（整理）	選んだ動物の動きをみせあう（全員）	踊	全身で動けた	3	2	5					
				創	大切なのは自分のとらえた動物観を全身で表現することだ	3	1	4					
				観	同じ音楽から様々なイメージと動きが得られおもしろかった	5(2)	5(5)	10(7)					
	好きな動物の「走り方」や「動き」の特徴を色々みつける	（導入）	同じ動物を選択した者同志グループになり、動きを出しあう（８～９人）	踊	様々な意見が出、異なった動きができた	6	3(2)	9(2)					
		（展開）	グループで気にいった動きを３つ程選び、感じが出るように続けて踊る練習をする	踊	何度も練習すると恥ずかしさもなくなり、みんなで一致し、なりきってやれた	0	2	2		体全体の動きが無かった	1	5	6
					ダンスは下手だがグループだと何とかやれた	6	1	7		発想が貧弱で大胆な動きがなかった	1	1	2
				創	１人ではできない新しい動きができた	3	2	5		全員が同じ動きでなくてもよかった	1	0	1
					全体の中で個人が活かされた	2	1	3		動きに強弱、緩急を作ればよかった	1	1	2
					全員で創り上げる喜びを感じた	0	3	3		もうひとつつっこみが足りない	1	1	2
整理		（整理）	発表する	踊	やったという充実感をわかちあえた	1	3	4					
				創	１つ１つの動きより全体のまとまりだ	2	1	3					
					自分達の創ったダンスに満足	0	2	2					
				観	他人のダンスをみることも楽しいし役に立つ	0	6	6					

内容がめだった。しかし，ダンスについてのイメージはある程度できており，漠然とではあるが技能の目的も持てたと思われる。

図2は，表3のうち各学習活動で達成感を得た学生の数を活動内容毎にまとめたものである。

図2　第1次の学習活動と達成感



これによると，導入段階の活動の中でも展開的な部分で達成感を得ている者が最も多い。(65人) 次が展開段階のやはり活動が展開される部分で，(23人) その後，整理段階までほぼ一定の (20人程度) 学生が達成感を得ている。

次に，斜線部分であるが，初めて達成感を得られた人数の変化である。この初めての達成感はすなわち克服群の出現を表わしている。

克服群は，導入段階で約60%，展開段階で残りが現われている。学習の前半でほとんどの者が克服群に入いることができ，そのことが，展開段階以降の達成感を支えていると思われる。

また，克服群は，導入，展開の各段階とも，その活動の展開部分で多く出現するという山形の図になっている。山の部分の内容の共通点は，新しい動きを創り出すことである。すなわち，それまでおもしろいし，これならできると考えていた「真似して動く」ことよりも，「動きを出し合いながら自分の動きをみつけていく」ことの方により興味を持ち，活動できたことを意味している。特に，導入段階での動きのみつけ合いのおもしろさ発見の驚きは，その棒グラフの長さに現われている。

そして，この発見は，動きをみつけるための手がかりを充分に，しかも具体的に与えられ，全身で動く楽しさを味わいながら次の活動に入いれたからこそ得られたものである。第1次の学習指導での導入は効果的だったといえる。この導入が，すなわち，引き続き行なわれる2回の学習への導入でもある。第2次の学習以降「恥ずかしい」の感想がなくなり，学生を学習に向かう気持にさせるための有効な導入であったとある程度評価できる。

全身でとらえ，表現できるおもしろさを知らせることは，特に，ダンス技能と精神的発達のアン

バランスの著しい学習者にとって必要であると思われる。

(2) 感想の変化にみられるダンス技能

学習活動に対する学生の感想は，そのうちの達成感をみていくと，各学習毎に特徴ある内容であった。第1次は，運動の表現性との出合いの「驚き」，第2次では，運動の表現性について「自覚」を持ちながら客観的に探求していく態度が見られた。第3次では，自分のこれまでの学習と比較しながら技能を確認し，「充実感」を味わっている。

第3次の感想は以下のようであった。

〈踊る〉

○人前でダンスをするのに堅さがとれて恥ずかしさが無くなった。(男子)
○ひたすら動いたせいか，あまり抵抗感を感じることなくよく動け面白かった。(女子)
○自分の思うように動かせるので体の解放感を味わった。(女子)
○動いている時は夢中で何も雑念がない。自我の解放だろうか。(男子)
○体で表現する楽しさを味わった。(女子)
○我を忘れて演じている自分に気付いて驚いた。これがダンスというものかも…。(女子)
○やったーという実感が持てた。(男子)
○人に自分を見てもらえるというのは恥しいことではなく誇りである。踊って人に見せるのが楽しくなっている自分がおかしかった。(女子)
○発表中，体育館中が静まりかえっているように感じたのが印象的。(女子)
○やっている時も，今回はピッタリ息も合ったし充実していた。(女子)
○一生懸命体を動かして自分達で何かを表現していくことの良さと楽しさを味わった。(女子)
○グループのみんなでその気になって踊れた。(女子)
○グループ発表の時の感動は忘れられない。(女子)
○始め失敗したが，みんなが演じることでほんの少しだけどダンスのおもしろさがわかった。(女子)

〈創る〉

○今年はイメージもどんどん浮び，それがすぐ動きとして出てきた。内面と結びついて人の発達段階と関わりあることがわかっておもしろい。良い作品ができた。(男子)
○なにげない動きにも敏感になり，表現するおもしろさも多少は理解できた。(男子)
○動くことが億劫でなくなった。自分から動く人が増えた。(女子)
○自分で創作できるんだという気持が持てた。まとまりをつくることは困難だが実感が伴った。(男子)
○ちょっとした発想で目の前が明るくなる。(男子)
○題材は身のまわりにあると痛感した。(男子)
○この作品はなかなか良く出来たのではないかと自分では満足。(女子)
○みんなから活発に意見が出ておもしろかった。(女子)
○全員が主体的に取り組みおもしろかった。創作しているという気がしてきた。(男子)
○みんなとても熱心に取り組んでいた。グループでひとつのテーマを表現しようとすることに感激を覚えた。(女子)
○みんなが活発で動きづくりが楽しくできた。ダンスのおもしろさ，楽しさがわかち合えた。(男子)

○やっていてかなりおもしろかった。皆が真剣にやっていた。全員で考え全員で真剣になると比較的苦手であった表現運動もこんなに楽しくなるものであるということがわかった。ある程度の到達点までは達した。(男子)
○みんなで個性的な動きを出していったのでよい作品となりました。(女子)
○集団で何かを表現していく楽しさがわかった。個々の動きがばらばらでもどこかで有機的につながり，全体がひとつのテーマを表現するのだ。(女子)
○事象の動きを発見して表現することはとても楽しい。こんなにもいろんな動きがあるのかと，動きや表現を見直すことができた。(女子)
○動きをみつけるおもしろさ，集団で協力する大切さを感じた。(女子)

〈観る〉
○雰囲気が出ていた。(男子)
○それらしい表現が皆でていた。(女子)
○テーマは表わされた。(女子)
○動きとテーマがよく理解できた。(男子)
○うまく表現できた。(女子)
○私たちのグループのダンスは全体的になかなか良い感じだった。(女子)
○やれば誰でもできるんだ。男らしい動きと女らしい動きがある。自分が恥ずかしがるほど人は何とも思っていない。みんなずっと上達した。(男子)

表4は，各学習での達成感より，「踊る」「創る」「観る」技能として特徴的なものを取り出したものである。表は技能の段階の意味を含め，下位から上位へ，第1次の学習から第3次の学習へと配置した。

第1次の技能の特性は，「動きの多様性と個性への興味」としてまとめられる。運動の表現性に気付き，技術修得の意欲が出た段階である。しかし具体的で客観的な技術認識には至っておらず，もし，この段階で学習が中断されれば，「ダンスは楽しく，興味深かった。」との感想は残るが，それをどのようにして子ども達に味わわせてやれるかの具体的な手がかりを持たないため，結局は指導できない教師にならざるを得ないと思われる。

第2次では，「イメージと動きの対応」が身についたと評価したい。表現の対象の持つイメージを自分の動きを通してとらえ，表現できる段階である。

「踊る」「創る」「観る」の各技能についてみると，「踊る」技能としては，自分の身体を表現の素材として客観視できることがあげられる。そして，素材としての身体の動きが，確かに表現の媒体になっているのかどうかについて，漠然とした不安としてではなく，意識的な疑問として探求できるようになった。

「創る」技能では，表現要因に関する知識の獲得がみられる。表現要因の内容は，強弱（力性），遅速（時性），大小，方向，向き，集散等（空間性）で，その違いによる感じの違いが意識化された。

「観る」技能についても同様に，対象のイメージと動きの対応を客観視できるようになった。それは，自分の表現についてはフィードバックとして，友達の表現については評価の形で現われている。また，様々なとらえ方があること，とらえ方の違いで表現に違いが出てくることに気付き，興味を持って友達との活動に参加できた。

表4　56年度（3年次）の3回の学習に対する感想にみられる技能

3	主題と作品の対応			充実感	整理
	主題に対する表現方法が選択できる 創り上げるおもしろさが味わえる イメージがどんどん浮かぶ 部分と全供の見通しができる ねらい　中心 だんだん　最高潮 はじめとおわり	作品全体のイメージを持って踊れる 踊った充実感が味わえる 観てもらいたいと思う 練習方法が工夫できる 友達と合わせながら踊れる 身体支配ができる 動きを整理し発展させて踊れる 身体づくりへの意欲が持てる	主題と表現方法に対する評価ができる 構成　とらえ方 動き　効果 感動を味わえる 好きな作品がみつけられる 舞踊観がいえる		
2	イメージと動きの対応			自覚	展開
	対象と対応する動きがみつけられる 感じの違いや動きの違いがわかる 強弱　遅速 大小　前後　左右 斜め　上下 集散 男女の特性 役割分担 場面のつながりに配慮できる	動きへの意欲を持つ どう見えているのか なりきるだけで良いのか 身体各部の動きへの配慮ができる 運動の要素が増す 男女の動きの良さがわかる	対象と動きの対応について評価できる 何を表わしているか感じられる とらえ方によって表現が違うことがわかる ものが持っている感じが味わえる		
1	動きの多様性と個性への興味			驚き	導入
	様々なイメージがあることに気づく 様々な動きがあることに気づく 自分だけの動きがみつかる	その気になって動ける 様々な動きが経験できる のびのび動ける	様々なイメージがあることに気づく 様々な動きがあることに気づく 大きな動きは美しい		
学習／技能	創　る	踊　る	観　る		

第3次は，ダンスの技術としてはまだまだ修得すべきものがありごく初歩の段階としかいえないが，「主題と作品の対応」としてまとめた。ただ，この段階までくれば，後は，教材研究を通して技能を伸ばし，指導法を身につけ考え出すことが可能ではないかと思われる。

「踊る」技能では，作品全体のイメージを持ちながら踊れるようになった。踊っている自分を内側から見ることもある程度でき，友達と合わせながら踊る楽しさも味わっている。見られて「恥ずかしい」気持は，「観てもらいたい」気持に変わっている。

「創る」技能として，主題に対する表現方法の見通しを持って作品創りに取り組めるようになったことがあげられる。学習目標とした，表現の中心の見極めと動きとイメージがはやく持てるようになった。主題をもとに，作品のイメージが次々と浮び，それを創り上げる喜びを味わっている。

「観る」技能では，「創る」技能ともあいまって主題の表現方法が評価できるようになったと言える。そして他人の作品に共感したり，自分の作品のできばえについても味わえるようになった。これは，自分なりの「ダンス観」（舞踊観）が持てたことの現われでもある。

「ダンス観」は，「恥ずかしさ」や「ダンスぎらい」を克服し，学習の各段階でダンスの本質に触れられた楽しさから芽生えた。そして，「自分なりに指導できそうだ」との感想や，「もっと知りたい」という教材研究への意欲も得られた。これは，指導者としての技能の最初の段階であり，しかも最も重要な第一歩であると考える。

「ダンス観」を持って，「指導者になったら…」の視点での感想も増し，自分が体験した学習活動での楽しさや充実感を子どもにも体験させたいとするものが多かった。

「人間が踊るということは，生きていることの一部だと思うようになった。人間は生まれると同時に踊りを持っていると思う。しかし今の僕みたいに大学生になってしまうと恥ずかしいと思うようになって，自分の好きなように動けない。僕は小学校でこんなことをした覚えがない。中学校でも，もちろん高校でも。でも，小学生は本来動き回りたい年頃だ。何の抵抗もなく動きが表現できるはずだ。もし小学校で体育を教えることになったら，ぜひ，ダンスもやりたい。」（男子）

この感想からも，指導者自身のダンス経験が，現場でのダンス学習指導への意欲に影響することがわかり，本質的なダンスの体験が必要であるといえる。

(3) 教員養成課程におけるダンス学習指導

昭和56年度小学校体育実技(2)では，学生のダンス技能をある程度伸ばすことができ，学生自身にも達成感を与えることができた。

レポートに記録された活動内容は，意識化されたものであり，身についた技能ととらえられる。そして感想や活動の記録には客観的な知識としてのダンス技術も書かれていた。このダンス技術は再び自己評価の基準としてフィードバックされ，その結果，学生自身の達成感や充実感をさらに深めたと思われる。

このようなダンス技能や，指導者として，教材研究への意欲も持たせることができたのは，次のような学習者の条件と指導目標や内容の設定による。

1．2度目のダンス学習で，学習内容が予測でき，学習に溶け込みやすかった。
2．教材研究を前提にし，指導者の目で客観視させながら学習に参加させた。このことでも，個人的，感情的な感想が減った。
3．各時間毎の学習目標を技能の段階で設定し，学習者に明示した。これにより，自己の技能が確認でき達成感を味わうのに役立った。

4．活動内容や表現の手がかりを精選し，明示したことで，学生が動きに専念でき，動きの感じを味わえるまで活動できた。ダンスの本質に触れられた。
5．グループ活動中心の学習で，過緊張をつくることなく，友達との技能の確かめ合いができ，楽しさを共有できた。

特に，3の学習目標では，「まとめられる」すなわち作品創りの段階まで設定したが，このことは教員養成課程の学生にとって，ダンス技能を伸ばすのに大いに役立ったと思われる。それは，他の表現手段（言語や絵画等）ではすでに，まとめ，作品化して自己表現できる学生だからである。一端，全身での運動という手段さえ与えられ，身体表現の本質に触れれば，一足跳びに作品探求が可能であるし，その欲求も生じる。このことは，第1次の学習での克服群の出現の仕方でも予想できる。そして，自主的な技能の開発も期待でき，これが教材研究の意欲にもなると考えられる。発達途中の幼児や児童対象のダンスの初歩的指導と，大学生への初歩的指導との大きな相異点はここにある。

教員養成におけるダンス学習のあり方は，ダンスの本質にふれさせ，教材研究の意欲を持たせること，換言すれば，ダンス教育そのものを通じて「ダンス観」を持たせる方向で計画されることである。

まとめ

小学校体育実技(1)での初めてのダンス学習では，「恥ずかしさ」や否定的な感想を持った者が多くいたが，小学校体育実技(2)では，第1次の学習から，「恥ずかしさ」や「ダンスぎらい」を克服できた。克服群は，「第1次の「全身で動く」ことを目的とした導入と展開の段階で，しかも，「創る」要素の含まれた内容で最も多く出現した。⑦

小学校体育実技(2)の各学習活動への感想の内容は，それぞれの段階での技能の特性を持って変化していた。技能の段階の特性は次のようにまとめられる。

第1次．動きの多様性と個性の興味
第2次．イメージと動きの対応
第3次．主題と作品の対応

そして，「踊る」「創る」「観る」のダンスの技能と共に，指導者としての「ダンス観」も生まれた。

今回の考察を通し，ダンスでは初歩的学習者であっても，まず，指導者としての目的意識を持たせ，できるだけ明確かつ客観的に，段階毎の学習目標や内容を知識として与えながら，ダンスの本質に触れさせ，技能を自から確認させるような指導が，教員養成での在り方であろうとの指針を得た。そして，教員養成における，ダンスの本質に触れさせる指導とは，ダンス教育そのものであると考えられる。限られた時間であっても，身体運動という表現媒体と出合えた驚きを与えられたならば，学生の表現欲求のレベルに応じた自己表現を実現させ，充実感を与える段階まで活動させたい。ダンス教育そのものを通し，ダンス観を持たせ，指導観を持たせることが望まれる。

おわりに

小学校体育実技(2)では，指導者となる側の「恥ずかしさ」や「ダンスぎらい」を解決できるための手がかりをつかめ，技能もある程度身についたと考えられる。しかし，現実は，ダンス観を持たせるという理想論ではかたずかない。例えば，体育館を1クラスで使用できる小学校が何校あるか

ということである。合同体育や，体育館を2分しての使用，教室や屋場での体育等が現状であり，ダンスは指導されにくい。また，体力遍重の考え方は今だにある。そして何よりも大きな問題は，現在の就職状況であろう。学生はできるだけ沢山の教育免許を取るのに汲汲としている。ひとつの講義はその場限りになっているのではないかとさえ思われる。そんな中で，学生が大学の講義に望むのは，現場ですぐ役立つ技術である。原理，原論，指導観を持って教材研究できる資質が養成できているであろうか。「指導者としての目的意識を持たせ」るその方向が問題である。

今後は，学習者の技能をさらに深めることを目的とし，焦点を絞り実践研究を進めたい。

註

①三浦弓枝　なぜダンスの授業はおもしろくないといわれているのか――不人気の原因と問題　体育科教育第30巻第6号　大修館書店

②岡田さつき　鳥取県小学校における表現運動学習指導について　昭和57年度鳥取大学教育学部卒業研究

鳥取県内の小学校の昭和56年度における表現運動学習指導に関して質問紙によるアンケート調査を行なった。各学校男女各1名づつの教師に解答を依頼，対象164校328名のうち76.2%（250名）の解答を得た。

③佐分利育代　ダンスにおける技術と学習内容に関する一考察　鳥取大学教育学部研究報告　教育科学　第20巻第2号　昭和53年

ダンス学習による技能の発達段階を「とらえられる」「続けられる」「変化させられる」「まとめられる」とした。

④クラス全体を3分し，器械運動，陸上運動，表現運動の3種目を同時に開講している。学生は，3回毎種目をローテーションして受講する。小学校体育実技(1)ではこの他に水泳を行なう。小学校体育実技(2)では，球技，水泳，器械運動，陸上運動，表現運動を受講する。

⑤佐分利育代　ダンス学習指導に関する研究(2)　第6回舞踊学会発表　1978年10月7日　奈良女子大学

昭和53年度小学校体育実技(1)の3回のダンス学習を対象に，ダンスの技術として何が教えられるかを検討した。

⑥③に同じ

⑦水谷は，表現嫌いの生徒に対し，内容のないリズミカルな運動を多く経験させ，しだいに動くことに自信をつけ恥ずかしさをとりのぞくことが望ましいとしているが，簡単な動きの手がかりでも表現や創造の本質的なおもしろさを知らせることが可能であり，その方がダンスへの近道ではないかと考えられる。

水谷光，ダンス指導ハンドブック　大修館書店　1975

参　考　文　献

女子体育　社団法人日本女子体育連盟編集　第20巻～第25巻第3号

松本千代栄　ダンス表現学習指導全書　大修館書店　1980

中島　花　小学校の体育指導 たのしいダンス　千人書房　1972

（昭和58年4月30日受理）